

愛と殺意の津軽三味線

新装版

西村京太郎

Kyotaro Nishimura

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

目次

第一章	津軽三味線	7
第二章	じょんから口説き	34
第三章	あるカップル	67
第四章	津軽雪譜	100
第五章	ある風景	133
第六章	恋人	167
第七章	最後の演奏	200

愛と殺意の津軽三味線

第一章 津軽三味線

1

自宅マンションは、深大寺じんだいじの近くである。中央自動車道の下を抜けたところで、三田は、脇道へ入った。

その方が、近道だったからである。すでに、深夜に近く、人通りも、消えている。月が明るかった。その月を見ながら、歩いた。別に、飲んで来たわけでもないのに、三田は、いい気分で、鼻唄はなうたが出た。

多分、月明りのせいだろう。

何か、音がしたような気がして、三田は、足を止めて振り向いた。

そのとたんだった。

鉄棒が、三田の顔めがけて振り下された。

呻うめき声をあげて、三田の身体がくずおれた。それに向って、第二撃が襲いかかった。

京王線つづけ丘駅で降りた時は、もうバスは、終っていた。

と、いつて、タクシーに乗るにしては、近すぎた。それに、幸い、五月中旬の夜で、暖かい。

だから、三田誠次は、自宅マンションまで、歩くことにした。

甲州街道を渡る。

明るくなつてから、新聞配達の青年が、死体を発見した。

殺人事件ということで、警視庁捜査一課の刑事たちが、現場に急行した。

被害者は、運転免許証から、三田誠次、三十五歳と、判明した。

住所は、深大寺東町×丁目のRマンション。倒れていた場所から、目と鼻の距離だった。

彼の顔は、血だらけで、右眼は、眼球が、飛び出している。後頭部にも、何ヶ所も殴られた痕があった。

犯人は、鈍器で、めった打ちにしたのだろう。

検死官も、死因は、脳挫傷のせいだろうといひ、死亡時刻は、昨夜の午後十一時から、十二時の間ではないかと、いった。

「財布は盗られていません」

と、西本刑事が、十津川に、知らせた。

「この近くで、最近、強盗事件が、三件も起きているそうです。狙われたのは、東京都心に勤めるサラリーマン二人と、OLが、一人です」

と、日下が、所轄署から得た情報を、十津川に、報告した。

「容疑者は、浮んでいるのか？」

「それが、いろいろな噂があつて、はっきりしていません。中年男だという噂もあれば、少年の二人組だという話もあります。いずれも、いきなり、鉄棒で殴りかかつて、氣を失った相手の財布を奪うというやり方で、被害者は、はっきりと、犯人の顔を見ていません」

「三人の被害者だが、死んでいるのか？」

「いえ。重傷者一人がいますが、三人とも、命に別状はありません」

「じゃあ、今回初めて、死者が出たのか」

「そうです」

「同一犯の犯行ですかね」

亀井が、いった。

「激しい抵抗にあい、初めて、死者を出したのか、全然別の犯人か、どちらかということだな」

と、十津川は、いった。

死体は、司法解剖のために、東大病院に送られた。

刑事たちは、被害者の三田誠次について、調査を進める一方、現場周辺の聞き込みを開始した。

西本と日下の二人は、三田の住んでいたRマシオンに足を運んだ。

十二階建の803号室が、三田の部屋だった。

2LDKの部屋で、かなり広い。

三十代に入って、まだ、独身の三田が、独身生活を楽しんでいたことは、部屋の模様からも、うかがうことが出来た。

夏には、水中ダイビングを楽しんでいたらしく、ダイビングスーツや、水中カメラなどがあつたし、駐車場には、休日に乗っていたという、国産のオープンカーも、とめてあつた。

パソコンを見ると、女性のメール友だちが、何人かいたことがわかる。

三田が、勤めていたのは、四谷に本社のあるKという製薬会社だった。

今の時代に、あまり、影響を受けない会社の一つだろう。現に、Kの株価は、安定している。その会社の販売第一課の課長補佐だった。

Rマシオンは、賃貸ではなく、三田が、所有していて、最近、二百万円かけて、リニューアル

アルしていた。

「かなり、いい生活をしていたんだな」

と、西本は、いった。

二人の刑事は、管理人に、三田のことを聞いた。

「明るくて、いい人でしたよ」

と、管理人は、いった。

まあ、半分は、お世辞だろう。

「ここに、女性を連れて来たことがありますか？」

と、西本が、きいた。

「何度か、見えましたよ。背の高い、二十五、六の女の人で、会社の同僚だと三田さんは、いつていましたね」

と、管理人は、いう。

「結婚相手ですかね？」

「いや、三田さんは、当分、独身でいくみたいなことをいつてましたね。独身が、自由でいいって」

と、管理人は、ちよつと羨ましうらやそうな顔をした。

部屋からは、銀行の預金通帳も、見つかった。それに書かれていた金額は、五百万円余りだった。

三十五歳で、自分のマンションに住み、五百万円の預金があれば、豊かな方だといつていいだろう。

問題は、彼に、敵が、いたかどうかといつことである。

三田を、殺したいほど、憎んでいた人間がいれば、物盗りの犯行とだけは、限定できなくなつてくるからである。

西本と日下は、それを知りたくて、部屋の中を、徹底的に、調べた。

まず、手紙である。

脅迫めいた手紙が、届いていないか。

しかし、手紙そのものが、殆ど無かった。最近の三十五歳、独身の男は、手紙のやりとりをしないのか。

三田は、ホームページを持っていたので、それを、調べてみた。

三田が、使っていたインターネット上の名前は、「まこと」だった。誠次の誠からとったのだろう。

「まるで、子供だな」

と、日下は、笑った。

よく、メールを交換していた女性は、三人。

もつとも、この三人が、全て女性かどうかは

わからなかった。

この三人とのやり取りは、ご丁寧ていねいに、コピーされ、残してあった。が、殺人を予想させるものは、見つからなかった。

「三田さんは、北国の生れですか？」

と、西本が、管理人にきいたのは、メールのやり取りの中で、「ボクは、北国の生れだから——」と、書いていたからである。

「岩手の生れだということは、聞いたことがありますね」

と、管理人は、いったが、

「しかし、もう、身寄りが、誰もいなくて、帰ったことはないよ、いつてましたよ」

とも、いった。

西本たちは、三田が勤めていたK製薬本社に向った。

最近、新しい抗ガン剤を開発したという話があつて、株価が、はね上っている。

三田の直接の上司である井上という販売第一課長に会った。

まだ、事件のことは、公おおやけになつていないから、井上課長は、三田が殺されたと話すときをかくさなかつた。

「信じられませんよ。昨日、あんなに元気だったのに」

と、いう。

「昨日、三田さんは、会社が、終つてから、何をしていたかわかりますか？ すぐには、帰宅

していませんが」

と、日下が、きいた。

「ひよつとすると、中野クンが、知っているかも知れません」

と、井上はいい、長身の若い女性社員を、呼んでくれた。

「どうやら、マンションの管理人が話していた女性らしかった。」

名前は、中野麻美。

日下が、三田のことを聞くと、あっさりとして、「昨日は、私のマンションに寄つて行きました」

と、いった。それから、眉をひそめて、

「何かあつたんですか？」

「昨夜おそく、自宅近くで殺されました」

「——」

麻美は、言葉を失って、俯うつむいてしまった。

西本が、彼女を、励ますように、

「われわれとしては、何としてでも、犯人を見つけて出したいのです。動揺されているとは思いますが、何とか、犯人逮捕のために、協力して頂きたいのです」

と、話しかけた。

麻美が、顔をあげた。

「なぜ？ なぜ、殺されたんですか？」

麻美が、叫ぶように、いった。

「物盗りの犯行かも知れませんが、物盗りに見せかけた殺人の可能性もあります」

と、日下がいった。

「あなたに、何か、心当りでもありますか？」

西本が、きいた。

「そんな、心当りなんか、全くありませんけど

——」

「三田さんに、敵はいませんでしたか？」

西本が、きく。

「いいえ。三田さんは明るい人で、他人ひとに恨まれることなんかなかったと思いますけど」

と、麻美はいった。

「しかし、誰か、いるんじゃないかもしれませんか？」

西本が、しつこく、きいた。

課長の話も、麻美の話も、信用できない気がしていた。

だから、本当のことを、ぜひ、知りたいのだ。他の人にも会って、話を聞きたい。特に、三田に好意を持っていない人間の話を聞きたいのだ。

「この会社で、三田さんのライバルと呼べる人はいませんか」

と、西本は、課長にきいてみた。

「そりゃあ、ライバルはいましたよ。何処どこの会社だつて、ライバルはいるでしょう。しかし、その人間が、三田クンを殺すなんて、とても考えられませんよ。殺したつて、何の得にもなりませんからね」

と、課長は、いった。

「しかし、三田さんが死ねば、ライバルがいなくなるんだから、喜ぶ人間もいる筈でしょう」
 「課長補佐の椅子が、一つ空けば、誰かが、そこに座つて、新しいライバルが生れるんです。その人間が、三田クンより力があつたらどうするんです。それに、うちの会社が、得意にしている胃薬品のシェアは、八〇パーセントで、ノルマは必要ないんです。あくせくしなくても、売れるんです」

と、課長は、いった。

「それに——」

と、課長は、説明した。

「サラリーマンには二通りあると思うのですよ。とにかく、仕事に精出して、力をつけ、同僚を追い抜いていく。もう片方は、出世より、現在の生活を楽しむ。三田クンは、後者の方で、三十五歳の独身生活を、楽しんでいましたね。夏になると、ハワイに行つてましたよ。そういう人間だから、同僚から警戒されることもありませんでした。従つて、恨まれることもなかったと思いますよ」

と、いった。

念のために、二人の刑事は、三田の同僚たちにも会つて、話を聞いたが、課長の言葉が、裏書きされた。

二人の刑事は、この結果を、十津川に、報告した。

「少くとも、会社の中に、三田の敵は見つかりませんでした。出世よりも、人生を楽しむ種類の人間だったと思います」

と、西本はいった。

「この不景気の時代に、羨ましい生活をしてい
たんだと思います」

と、日下も、いった。

すでに調布警察署に、捜査本部が、設けられていた。

その中で、十津川は、集まってくる情報を、一つずつ、検討していた。

西本と、日下の報告も、その一つだった。

(これで、少し、物盗りの線が、強くなったな)
と、思った。

現場から、凶器の鈍器が見つければ、もっとはつきりするのだろうが、それはまだ、見つかっていなかった。

聞き込みには、四人の刑事が、当たった。

三田村、北条早苗、田中、そして片山の四人である。

事件そのものが、深夜に起きているために、殺人の目撃者は、見つからなかった。

ただ、三田を見かけた人が、皆無だったわけではなかった。

同じ時刻に、京王つじヶ丘駅で降り、同じように、バスが無くなっていたので、歩いて、自宅へ帰った人間もいた。

東京都庁に勤める白木茂、四十歳も、その一人だった。

彼は、甲州街道を渡ってすぐの所に、自宅が

あつた。そこまで、白木は、自分の眼前を、三田が歩いてゐるのを見ていたと、いう。

「時刻は、十四日の午後十一時四十分頃だつたと思います。間違ひなく、亡くなつた方だと思ひます。ご機嫌で、鼻唄を歌つていましたよ」と、白木は、いつた。

白木の証言する男の服装は、三田と同じもので、間違ひなく、三田誠次だと、十津川は、断定した。

奇妙な証言もあつた。

現場は、小公園の中なのだが、その近くに建つマンションの二階の住人の証言だつた。

証言者は、北野ゆみ、十九歳。

浪人で、都心の予備校に通つていた。

あの夜も、受験勉強をしていたのだが、疲れ、窓を開け、夜気を入れたという。

「月が、きれいだったので、ぼんやり空を見てました。そうしたら、公園の方から、三味線の音が、聞こえたんです」

と、ゆみが、いう。

「三味線ですか？」

早苗は、聞き返した。

あまりにも、殺人事件にふさわしくない呑気な言葉に、思えたからである。

「ええ。三味線の音です。津軽三味線」

と、ゆみは、きつぱりと、いつた。

最近、津軽三味線が好きになつて、受験勉強の合い間に、そのCDを聞いているのだといひ、それを、かけてみせてくれた。

「津軽三味線が、聞こえたのは、何時頃ですか？」

と、早苗はきいた。

「確か、十一時五十分過ぎ頃だったと思います」

と、ゆみはいう。

「それは、どんな風に聞こえたんですか？」

「窓を開けて、夜空を見ていたら、突然、聞こえたんです。それで、『あらッ』と思って、公園の方を見たんです」

「何か見えましたか？」

「いいえ。木が邪魔になって、何も見えませんでした。それに、三味線の音はすぐ、止んでしまったんです」

と、ゆみは、いう。

「津軽三味線って、静かな調べのときと、激しい調子のときとあるでしょう。そのどっちに聞こえましたか」

「私には、静かに、哀調を帯びて聞こえました。

ただ、あの時は、私は、月を見ていて、感傷的な気分になっていましたから、そのせいかも知れません」

と、ゆみは、いった。

十津川は、この報告を重視した。が、事件に關係があるかどうかの判断は、簡単には下せなかつた。

最近、津軽三味線は脚光を浴びていて、CDも、よく売れているから、犯行の時間帯で、近くに住む人間が、そのCDをかけていたかも知れなかつたからである。

それなら、津軽三味線の音は、事件とは、關係がないことになってしまふからだつた。

十津川は、なお、聞き込みを、続けることを、命じた。

結局、事件が起きた時間に、津軽三味線の音

を聞いたのは、この女性だけだった。

十津川は、こう結論を下した。

「北条刑事が聞き込んだ、津軽三味線の話だが、今のところ、事件に関係があるかどうかは、不明だ。もし、関係があるとすれば、犯人特定の、大きな手がかりになるので、引き続き、聞き込みを続けて欲しい」

3

一週間たった五月二十一日の夜。

板橋区にあるアパートの近くで、殺人事件が、起きた。

このアパートは、「アサヒコーポ」という名前がついていて、六部屋がある。

駐車場は、隣接していなくて、歩いて、五分ほどのところにある空地に、「アサヒコーポ駐

車場」の看板が出ていた。

このアパートに、一年前から住んでいる、二十八歳の沢田あきは、いつものように、駐車場に、車を入れた。

ただの空地で、ルーフもなく、管理人も置いてないのに、一台分、月一万三千円の駐車代をとられている。家主は、相場から見れば、安いというが、あきは、ただの空地に、一万三千円は高いと思っていた。

とにかく、不用心なのだ。先日も、他の車が、夜中に、車上荒しにあっていた。

だから、今夜も、何もかも手に持って、車を降り、キーをかけた。

その時、何か、音が、聞こえた。

それは、三味線の音みたいに聞こえた。

(何なのかしら?)

と、いう感じで、あきは、振り向いた。その瞬間、いきなり、鉄棒が、振りおろされた。

声も出さずに、彼女の身体は、その場に、崩れおちた。その顔に、二度、三度と、凶器が、振りおろされていく。

日が変わって、午前一時過ぎに、十津川たちは、現場に駆けつけた。

死体は、警ら中の警察官が、発見した。

初動捜査班の刑事が、十津川に、事件の概略を説明した。

(よく似ている)

と、十津川は、思った。

だからこそ、十津川たちが、呼ばれたのだらう。

ハンドバッグの中から、財布が、見つかった。

そして、十津川が、注目したのは、初動捜査

班の刑事の次の言葉だった。

「この駐車場に接して、雑居ビルがあるんですが、その中にあるラーメン店で、店が終了し、後片付けをしていたんです。あの窓が、その店です。そうしたら、三味線の音が、この駐車場から聞こえたというんです」

「それは、津軽三味線の音じゃないのかな？」

と、十津川は、きいた。

「そうです。それで、店員は、駐車場で、誰かが、深夜、練習をしているのかなと、思ったそうです」

「窓を開けて、見たのか？」

「いえ。すぐ、三味線の音は、止んでしまったので、見なかったと、いっています」

「時刻は？」

「十一時五十分頃で、犯行があったと思われる

時刻と、重なっています」

と、いった。

「偶然の一致ですかね？」

亀井が、首をかしげていた。

「かも知れないし、犯人と、関係があるのかも

知れない」

十津川は、あくまでも、慎重だった。

「とにかく、被害者のことを、よく調べてみよう」

と、十津川は、つけ加えた。

西本と日下の二人が、被害者の住む「アサヒ

コーポ」に、向った。

二階建の201号室が、被害者沢田あきの部

屋だった。

六畳、三畳の二部屋に、バス・トイレつき、

それに、小さなキッチンがある。よくある間取

りだった。

部屋の中を調べながら、管理人の話聞いた。

「沢田さんは、独身で、いろんな仕事をやって

いたみたいですよ」

と、管理人は、いう。

「つまり、フリーターということですか？」

西本が、きいた。

「ええ。ただ、パソコンが出来るので、最近は、それを使う仕事をやっているんだと、いっていいましたね」

なるほど、六畳の部屋には、パソコン、プリンター、などが並んでいる。

それに、デジカメと、ビデオカメラ。

刑事の一人が、最近、作ったと思われる名刺

を見つけた。ケースに入っていて、殆ど、減っ

ていない名刺で、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。